

愛のテール

プロローグ

お上品なピアノ曲が流れる中舞台上に数人の男と女、ピアノに合わせて体を動かすがだんだん曲はゆがみ始める。ゆがみのピークで群衆は走り出し「衝突」する。倒れ左ほほを押さえて立ち上がる。舞台の中央に左ほほを押さえた女が現る。テーブルで左ほほにまいた包帯を交換し始める。

群衆

私の顔はいじられた。

憶えているのは麻酔を打たれ大きなエレベーターで地下へ降りていくところ。ずっと上を向いていた。

私の顔はいじられた。

目を覚ましたときお医者さんが言った。

「はじめは皮がはがれてびろびろだったんだよ」。

看護婦さんがお見舞いの人が来ていると言った。

彼氏だった。

ベットの横に立ち、じっと私の顔を見て、一言。

「大丈夫」。

女

その日から私はかわいそうな女になってしまった。

女はテーブルにうつぶす

群衆が女の周りに服やら雑誌やら化粧品やらをばら撒く

暗転

舞台上に醜い犬（ゾルダン）

ゾルダン

こんばんは。皮膚病の犬です。今日みなさんにご覧頂くのは掃除のできない女

の話。料理もちろん裁縫だって出来ません。そんな彼女が顔に傷をつくる。部屋に閉じこもる。仕事はしない。太る。風呂には入らない。塩っ辛いものばかり食う。携帯の充電すらなくなる。畳をむしる。夕方にはベランダから鳩にえさをやる。いい事なんか何もありやしない。彼女が再び昼の世界に戻るまで、え？戻れるの？って感じて、物語はすすみます。まずは彼女の母親が部屋に来るところからどうぞ。

シーン① 母の来訪といま会いたい人

ゆっくり明かりがつくとひとつの風景が見えてくる

散らかった部屋を二人の女が掃除している風景だ

よくみると一人は中年(母)でありもう一人は部屋着をきて今起きたばかりといった様子、その女の顔を見ると顔の半分が包帯で覆われている

二人の会話が聞こえてくる

意味がないのよ。

違うって。

違うことない、意味がない。

もういいわ。

あきら君の部屋みてみいや、きちつとしてはるやないの。

モノが少ないからやん。

そしたらあんたもモノ減らし。

へらへんの。

捨てよか。

やめて。

お父さんみたら卒倒しはるわ。

しやーないやん。

しやーないことない。

モノが多いの。

そんなな、箱やら柵やらあってもなちゃんと元の場所にもどさな意味がないの。

母 女 母 女 母 女 母 女 母 女 母 女 母 女 母

母 女 母 女

うるさい。
はよ起き、もう何時やおもてんの、私恥ずかしいわ。
うるさい。
おっさんほらどきや。

母は女の布団を上げる。ものすごい埃と悪臭

母 女 母 女 母 女 母 女 母 女 母 女

あんた布団の上でパン食べてるやろ。
ごめん。
おっさんお茶入れて。
えー。
掃除したってるんやからお茶ぐらい入れなさい。
突然こんといてや。
連絡ぐらいしなさい。
しようと思ってたの。
なんでもあきら君に任せてたらあかんで、恥ずかしいわ。

女はお茶を入れに行く。

母はベランダを開ける。

埃が入る。
あんたのアレルギーはうそや。
わけわからん。

ベランダの外から近所の高校のラグビー部のランニングの掛け声が聞こえてくる

女 母 女

しめて。
かわいいやないの。
むかつくねん。

母 陰々滅滅やね。

女 は？

母 あんたよ。陰の風が吹いて滅の雨がふいとんねん。

女 何のはなしよ。

母 女がお茶をもってやってくる。

女 あんたの保険証でできたで。

母 やった。

女はお茶を母に渡す。

母 ありがとう。

母はお茶を飲み、女を見つめる。

女は少し身構える。

母 傷みせてごらん。

女 いやや。

母 …あきら君がな、今度お父さんに会いたいって。

女 は？

母 ちゃんと話したいねんて。

女 …もう、最低や。

母は女のその言葉を聞いて何も言わず。再び部屋を掃除し始める。

女はベランダで一人たたずむ。

母は掃除をしながらちあきなおみ「喝采」を口ずさむ。

「喝采」

いつものように幕が開き

恋のうた歌う私に 届いた知らせは

黒い縁取りがありました

あれは三年前 とめるあなた駅に残して

動き始めた汽車に一人とびのった

…

女は思い出す昔のこと、まだ小学生だった頃、母が掃除をしながらよくこの歌をうたっていたことを。

女がベランダから部屋を振り返るとそこに座り込んだ少女の影がみえる。

少女 最近さ、あの人みいひんな。

母 どの人？

少女 「あれは三年前」の人。

母 ちあきなおみかいな。

少女 死んだの？

母 クニにかえらはったんちやう。

少女 国？

女 あの頃から私は頭が悪かった。

少女 国があるんや。

女 ちあきなおみの国。そんな国がどこにあるとそのとき私は信じ込んだ。

母 いろいろある人やから。

少女 いろいろ？

母 かわいそうな人なんよ。

少女 なにが。

母 男運がほれ。

少女 ほれ？

母 旦那さんがほれ、よく死なはるの。

少女 よく死ぬ。

女 ちあきなおみの国では、男がよく死ぬ？

母 …あんなに考えてるの。

少女

別に…。

母は再び「喝采」を歌う。

女

昔、この歌を歌う母が少し怖かった。あれは三年前、止めるあなた駅に残して、それは私の知らない母だ。私を生む前、父と結婚する前この人はナニをしてたんだろう。

少女はいなくなって母のみが掃除している。

女がベランダから入ってくる。

女

なんでこんなことなったんやろ。

母

厄年ちゃうか。

女

もうあかんわ。

母

そんなん考えたかてしゃーないやないの。

女

結論はやいねん。

母

ほんまのことやないの。

女

…もうあかんわ。

母

こないだな、テレビで言うてはったわ、演歌歌ってはる人はどんなに生活が苦

女

しくてもキンキラキンの服を着はるねんて。

母

…関係ないやん。

女

ボロは着ても心は錦。

母

あー、…は？ナニが言いたいの？

女

励ましてるんやん。

母

もういい。

女

しょーもないこと考えたらあかんよ。

母

なによしょーもないことって。

女

どうしようもないことをグチグチ考えることやないの。

母

喋りたくないの。

女

はいはい。

女 …お父さんと話ってなんやろ。

母 そらな。

女 …。

母 ちゃんとした話やろ。

女は黙り込んでしまう。母は掃除を続ける。二人はときおり会話もするがそれは聞こえてこない。外の音のみが聞こえる。やがて夕方になり母が去り、夜が来て女はベランダに立ち外を見る。

ゾルダン 昼間寝て夜起きる。そしてあんなふうにベランダに出ては外を見る。その部屋

はアパートの四階にありましたから誰にも見られる心配はないだろうと、えらそうに、だらしなく、外を見る。そして次にすることは…

女 ゾルダン

ゾルダン 他人のうちの犬に勝手に名前をつける

女 うーわうわう。わう！

ロボットみたい？ロボット見たいやろ、

バイクで事故ってん。十五針も縫った。ジュウゴ。

彼氏がさ、勝手に実家に電話してん。

私このまま結婚するのかな。

ゾルダン。

私放火しそう。

今まで全然そんな話せーへんかったくせに

(ゾルダンに向け) もうちゃんと聞いてよ！

♪いつものように幕が開き

恋の歌歌う私に…

お母さん。今一番話をしたいのは、若い頃のあなた…。

女
どこかに国を創りたい。どこまでいつてもずっと夜で、みんな自分のことしか
考えない。わがままなヤツしかいない国。

ゾルダン はうなずく。

女
その国はちあきなおみの国。私の知らない母の国。母がちあきなおみとして青
春時代をすごした国。国は山に囲まれて、タニシとイナゴと蓮華の国。

ゾルダン

…。

女
その国の男はみんなラグビー部。

ゾルダン

…。

舞台上にラグビー部が掛け声をかけつつランニング。

ラグビー部
じ・ねんじよ。じ・ねんじよ。…（これは掛け声）

部員①
よーし、体操するぞ！

ラグビー部
おー！

女
そこに二人の妖精が現れるの。

舞台上に無愛想な妖精が現れる。

ゾルダン

…。

女
陰子と滅子。陰々滅滅の陰に、陰々滅滅の滅

ゾルダン
女はわたしに語り始めました。自分のためにその国の話を。若い頃の母に出会

うのが無理ならば、若い頃の母を想像してやろうというわけです。女が語る幻
想の国。しかしみなさん、初めに言っておかなくてはなりません。この女かな
り頭が悪かったということ…。

部員①
（体操が終わって）よーし、反省するぞ！

女
陰の風が吹き。

舞台上にあからさまに不吉な風。

ラグビー部の男たちは不意に起きた風にお互い身を寄せ合つ。

女
滅の雨が降るとき。

舞台にあからさまに不吉な雨が降り。

ラグビー部の男たちは濡れた上着を脱ぐ。

女と陰子と滅子 人はそれを陰々滅滅と呼ぶ。

陰子と滅子は男たちの大事なものを自然薯のように引き抜いていく。殺戮にも似た男いじめが始まる。

ゾルダン … (あきれた顔をして去る)

女 いじめられた男たちは呼ぶの。自分たちのリーダーを。

ラグビー部 二階堂先輩！

一世風靡セピア「前略、坂の上から」のイントロが流れる。
ラグビー部のリーダー二階堂先輩現る。

二階堂 オロロン、オロロン！海が泣いています、波がしぶきを上げています。そしてもちろんこの僕も、泣いています。ホワイトアスパラガス高校ラグビー部主将二階堂駿！歌わせていただきます！

♪海を潜るには
息を止めなきやもぐれない

二階堂 当たり前やんけ…。自己否定！男三十自己否定！さあ小童ども、俺のを抜いて
みる！

陰子と滅子 陰々滅滅！

陰子と滅子は二階堂の大事なものを何度も抜くが二階堂はへいちやら。

二階堂　　はははは！山芋！山芋もってこい！

陰子と滅子　きりがねえや

二階堂　　よくうちのラグビー部員をいじめてくれたな。たっぷりお仕置きしてやるぜ。

おらー！

抜き疲れた陰子と滅子にいよいよ二階堂の逆襲かと思われたとき。

声（女王）　およしなさい。

「夜明けのスカヤト」が流れ、女王由紀さおりあらわる。

女　　声の主はこの国の女王由紀さおり。

ラグビー部員の一人が二階堂先輩への山芋を持って現れる。

部員②　　持ってきたよー。

女王は部員②の腹を触る。すると腹は大きく膨らみ、破裂する。さらにひれ伏すラグビー部員たち。

女王　　皆様こんばんは。本日はあちらのお嬢さんの空想の世界の女王役だつて聞いたもんですから、私勇んで勇んでまいりましたの。あら、ご紹介が遅れました。私、「卵に目鼻」の由紀さおりでございます。まあはじまって十五分もたたないうちにラグビーの方々がこんなになつてしまつてどうなることやら、もう私はらはら、どきどきしております。

（少し世間話などして）二階堂先輩。今日が何の日かご存知？

二階堂　　はい。今日は…。

女王　　ええ今日は…。

女 そう今日は姫のために男が土に埋められる日。

ラグビー部 ええっ!?

女王 ひーめー、ひーめー!

姫があらわれる。

女 彼女こそこの国の姫ちあきなおみ。そして若い頃のわたしの母。

ラグビー部の男たちは『喝采』を歌う。

女 この国には女は二人しかいない。姫と女王、女王はこう見えて七十二歳だから事実上女は姫一人。

姫 やめてお母さま私のために男の人を土に埋めるだなんて。

女王 女のよしあしは埋めた男の数で決まります。あなたはいい女にならなくてはいいけません。二階堂先輩。本日のいけにえはもう決まりました。

二階堂 …はい。

姫 どうしてどうしてこんなこと。

女王 男は土に埋められて、埋められながらもあなたを思い。土に帰って栄養となりあなたに花をさかすのです。すべてはあなたのため。

姫 でも。

女王 「でも」…なんですか？

二階堂 たもつ! (人名)

たもつ はい!

一人の男(たもつ)が選ばれる。

女王 ミ・アモーレ!

荘厳な音楽がかかり。たもつは姫の前に引き出される。

儀式のようにたもつはひめの胸をちよっとだけさわらせてもらう。

女 姫の胸はでかかった。その胸の前で男はもだえうろつきちよつと内股になって沈んでいった。さわりたいさわれない。男は代わりに斧をもって木を切り倒す。たちまち山は禿げあがる。「私の胸は一日で山を禿にする」。伝説のポインちゃんだった。

たもつ

おお。

女王

土に埋めよ。

墓掘り人があらわれ、たもつをひったてる。

たもつは湿った目で姫を見詰める

陰子と滅子はたもつを埋める準備にとりかかる。

女王

よくごらん下さい。埋められていく男の目を。

姫

あの人私のこと見てる。

女王

あなたは憎まれている。

姫

どうして。

女王

しかたありません。あなたは愛されているから。

姫

わたしが？

女王

この国の男であなたを愛さない男はおりません。

姫

あれがいとしい人を見る目なの？かわいそう。

女王

姫はあの男をあいせますか？

たもつは湿った目で姫をみながら土に埋められていく。

姫

でもかわいそう。

女王

かわいそうは愛ではありません。見るのです、あなたの栄養となる男の目を！

姫

やめなさい！

儀式は中断されてしまう。

姫は男を助ける。

姫 この人を部屋まで。

女王 この男を愛するのですか。

たもつ ちよつとだけおっぱい触らして。

姫 わかりました。

女王 およしなさい。

姫 ちよつとだけって言ってるもん。

女王 そのちよつとだけが続くのです。

たもつ、姫の胸を触る。騒ぐ群衆。

たもつ ちよつとそつちもいいかな？

姫 …わかりました。

女王 およしなさい。

姫 減るもんじゃないもん。

女王 あなたはまだ知らないんです。

姫は男に胸を触らせる。

たもつ …ちよつと、ちよつといいかな。

たもつは姫の肩に手をまわす。

姫 なに？なにになに？

たもつ いやちよつと、ちよつとちよつと。

姫 なによ？

たもつ 悩み事とかない？

姫 は？

たもつは姫に情けなく襲い掛かる。

騒ぐ群衆。墓掘り人がたもつをとり押さる。

女王
つれていけ。もう姫の栄養にはならん。
たもつ
ちよつと、ちよつとだけ！ちよつと！

たもつは連れて行かれる。
姫は泣く。

女王
あなたが悪いんですよ。かわいそうなどとおっしゃるから。

姫
あの男は本当に私を愛していたの？

女王
愛はすぐに形を変える。愛から愛と呼んでいいにかへ。愛を感じ愛をこの手につかもうとしても、手に残るのは愛のしっぽだけ。でもあなたは本物の愛をつかまなくてはなりません。愛をひまわりのようにその胸にさして街を大まかで歩かなくてはいけません。いいですか、姫はいつかこの国を旅たねばならぬ身。この国の外では大勢の男女が愛に酔い身を削って愛を遊んでいます。ここで学ばなくてはいけません。大勢の男を土に埋めて、愛の何たるかを知るのはです。

姫
私苦しいの。私のために男の人が埋められていく、そんなの私耐えられない
女王
辛抱なさい。あなたが愛をつかむまで。

姫は再び泣く。

女王
女は頭が悪かった。男は消耗品だった。そして時間だけはあるようだ。だから考えた愛について。そしてわかり始めた。いい男は喋らない。丸い男は嫌いだ。それは姫自身が丸かったから、丸と丸が重なって丸い子供が生まれることを何より恐れた。それで夏はとんかつ、冬はとんかつを食べている家族にだけはなりたくなかった。こうして姫のために58人も男たちが土に埋められた。58かける2で116の瞳が姫を見詰め土に埋められた。乳を触らせ、つばを飲み込み、男は泣き出す。一人埋めるたび姫の影は濃くなって、人に対してやさしくなれた。でもその男は…。

ラグビー部の男たちは二階堂を中心にして集まる。

二階堂

(姫を指差し) 俺はお前を抱いてみせる！

ウキャウキャ騒ぐ男たち。

二階堂にそういわれ立ち尽くす姫。

女王

姫。帰りますよ。

そういつて姫と女王と陰子と滅子はその場を立ち去る。

女

ここは馬鹿しかいない国、反省なんかしない国。わがままで根暗で太陽はなく、顔の傷なんかで悩んだりしない国…。

一人の少女が現れる女に直接リリアンを手渡す。

女

懐かしい…。

少女

ドラキュラがくる。

女

え？

ボタンと玄関の扉の開く音。女が同棲をしている男(あきら君)が帰ってきた。

あきら

ただいま。

女のすべての幻想は消えてしまう。手にしたリリアンを残して。

シーン③ あきら君の帰宅、結婚話

あきら君は片付いた女の部屋を見て感動する。

久しぶりにしまるフスマに喜ぶ。

しかも台所には女の母がつくっていった筑前煮があるではないか。

あきら君はその筑前煮をつまみながら女に話しかける。

あきら
めっちゃ上手い。

女
栃木にも筑前煮あんの。

あきら
なに言ってるんだ、おめーは。

女
こんにくくばっかりちやうの。

あきら
そりや群馬だんべ。栃木はカンピョウとイチゴ。

女
かってに電話せんといってくれる。

あきら
でも。

女
勝手なことせんといて私いましてんどの。

あきら
今日は外にでたか？

女
出れるわけないやん。

あきら
…こんにくくねじれてる。

女
私のぶんものこしといてよ。

あきら
おまえもさ、この機会に料理とかどう。

女
なによどうって。

あきら
憶えたら。

女
もうそんな状況じゃないの。みたらわかるやろ。

あきら君は女を触りまくる。

女
やめてよ。

あきら
うん…。

女
疲れてるんやろ。

あきら
うん…だからちやちやつとしよ。

女
なによそれ。

女はあきら君から逃げる。

女 なによちやっちやとって。

あきら …もう寝るわ。

女 いま何時？

あきら おまえのほうが時計ちけえべ。

女 …（時計をみる）はー。

女は少女から渡されたリリアンを手にとる。

隣の部屋からあきらくんの声だけが聞こえてくる。

あきら あーつかれた。

あきら君はおおきな音をたててタンをはく。これはあきらくんの就寝前の儀式のようなもの。

女 きしよい！

あきら おれけ？（あきら君は女の部屋に顔を出す）

女 おれじゃ。

あきら …ちよつと日本語おかしいな。

女 うるさい。

あきら ピクニックに行くか。

女 いきたない。

あきら 料理をおぼえるか。

女 わたしはな、中学高校とずっとバレーボールやってたの。

あきら だからなに。

女 …なんでもない。もうしゃべらんといて。

あきら うん。

女 もうむこう行って！

あきら おやすみ。

そういつてあきら君は再び自分の部屋へ。
姿が見えないあきら君の気配を女はじっと感じている。
そしていらいらしくくる。

あきら バイト先にさ。社員にしてくれってお願いした。

女 …。

あきら こんどお父さんとも話すから。

女 どういうことよ。

あきら もういいやん。

女 いいことないやん！どういうことって？

あきら こんどどっかいこ。天気いい日に、外にでようぜ。

女 …ごめんな。わたしいま最悪やねん。

女は興奮を鎮める。再びあきら君に声をかけるがもう寝てしまったようだ。

女は机の上にちいさな鏡をのせ顔の包帯を取り替えはじめる。鏡には生々しい傷跡がうつる。包帯をとりかえると女は再び部屋を汚していく。

女はベランダに飛び出し、再び皮膚病の犬に声をかける。

女 ゾルダン！

シーン④ 幻想の構造と愛の行方

ゾルダン ゾルダン。いいでしょう。なんでもいいんです。ぼちでもタローでも呼んでい

るようでよんでいない、だってそうでしょう。人は犬の目を覗いてかわいいたとか、のんきだとかいった誰にいつているのか、ゴミ箱ですな。犬の目に映るのはどこまでも自分。自分、自分。ゾルダン、いいでしょう。ごらんの通りわたしは皮膚病ってやつですな、蚤だかダニだかご主人様は思ってるみたいですが、ちよつと違う。たぶんですがこれは自律神経から来るものです。皮膚の新陳代謝、これが狂ってる。ではなぜこれが狂うのか、それはわからない。どうでもよろしい。飼い主は昼はわたしを小屋に閉じ込め、夜の十時をまわった

ところで外に出す。わたしもそのほうが楽なんです。人間ってのは犬というところ無邪気なお気楽なものと思いたがる、苦しんでる、悩んでる犬など見たくない。花びらに己の鼻先をつっ込んでモンシロチョウでもその鼻先につけば大喜びです。で、わたしは皮膚病です。太陽とは無関係の犬。でもご存知ありますまい。夜には夜の友達がいることを。

舞台上「夜の友達」たちが現れる。

ゾルダン

色を落としたタンポポの落ち着いた語り、光に背を押されていた柿の木が夜には背をそらし悠然と街灯と語り合う姿、ガレージの車と蜘蛛は恋人同士で黙って見つめあう、空には月と雲、生ぬるい風、そしてベランダから目を覗く顔に包帯を巻いた女…。

「夜の友達」たちは以下に続く女の独り言に合わせて動く。

女

あるところに男と女がいました。二人は川辺に座っていました。向こう岸を犬が走りました。犬はいいなーと思いましたが、爆弾が落ちて死にました。あるところに女がいました。髪を切りすぎた帰り道、公園がありました。座っているか迷いましたが、爆弾が落ちて死にました。あるところに女がいました。電信柱が続いていく、あるくことが嫌になる。嫌になることも嫌になって笑おうとしたら馬がいました。

ゾルダン

あのねえ娘さん。私らを見てあんたが何を想像しようが勝手ですが、言っちゃああなたが雑というかガサツというか、底の抜けた女だねえ。馬がいましたって…。あれはどうしたの、あんたのお母さんがちあきなおみだったってやつは。まあ、あんなこと考えたところで、あんたが昼の世界に戻れるとは思えんがね。

女

わう、わん、わん！

ゾルダン

なに、なんだよ。ワウス！ワウス、ワウス！！

ゾルダンの飼い主が現れる。女はベランダに隠れる。

飼い主　　こら！…静かにしろ。

飼い主去る。

ゾルダン　下ネタが多いよ。夜はあんたを励まさない、慰めない、「がんばれ」とも言わないし、「大丈夫？」とも言ってくれない。だからこそ深入りしちゃいけないだよ。

女、うなる。

ゾルダン　あんたに夜は向いちやいないんだ。このまま徹夜して、朝が来たら山に行きなさい。いい汗つてやつでもかいてごらん、そしたらそのまま夜は寝られるよ。

女　　あたしが山に行ったら自殺かと思われる。

ゾルダン　誰も見てへんわお前なんか！

女　　わう、わう、わう！

ゾルダン　ワウス、ワウス、ワウス！

再び飼い主が現れ、ヒロ（ゾルダンのこと）を静かにさせる

飼い主　　ヒロ！ヒロ！ヒロ！ヒロ！…どないしたんや。

飼い主去る。

ゾルダン　　：勝手にしなさい。

女　　だって、誰もあたしの話聞いてくれへんもん。

ゾルダン　　ああ、そうですか。何でも想像してください。でもね、夜に引きずりこまれちゃいけないよ。もしそのときには、あんたを無理やりにも太陽の下にはうりだしますからね。

女　　：バカ。バカしかない国。

「夜の友達」たちは「ちあきなおみの国」の人々になる。
ラグビー部の連中あらわる。ラグビー部の男たち今日はプールに入るようだ。
みな腰にバスタオルを巻いて着替えている。その姿は乙女たちのようだ。

女

その日はプール開きの日。男どもは恥らいつつ両隣に笑顔なんか送ったりなんかして、基本的にかわいい。でもそんなことは許されない、明るく恥らうなんて許されない、すぐに空は曇りやりきれない雨が降る。

陰々滅滅が現れ男どものバスタオルを剥ぎ取る。

そこに二階堂登場。

二階堂

（陰々滅滅に向かって）やめろ！なぜプール開きの邪魔をする。

女

馬鹿だから。

二階堂

（陰々滅滅に向かって）人のことを馬鹿って言うほうが馬鹿だ。

女

馬鹿でいいもん。

二階堂

（陰々滅滅に向かって）すぐに開き直るな。何でもかんでもすぐ開き直るのは悪いことです。洗濯物だつてそうだろ、まあいいかたまたまなくてもって気持ちがあいいか干さなくてもって気持ちになつて脱水したまま置きっぱなしのやつ引き伸ばして着はじめてそしたらあと一歩だ。まあいいかくさくさくもって気持ちになつて、洗濯は一切しなくなる。

女

いいもんくさくても。

二階堂

（陰々滅滅に向かって）よくない。

女

人間くさいもんですよ。

二階堂

（陰々滅滅に向かって）またはじめた極端な言い訳が誰が人間全体の話をした、私は社会人としての話をしているんだ。俺たちを見る、われわれホワイトアスパラガス高校ラグビー部の面々はプールに入るにもネクタイを締める！これが社会性っていうもんだ。

女

ばか。

二階堂

（陰々滅滅に向かって）馬鹿っていうな！

女王

およしなさい。

「夜明けのスキット」にのって女王あらわる。

ラグビー部員②が遅れて来るが、またも女王に腹をさわられ、破裂。

女王

二階堂先輩、あなたがなにをおっしやろうとここは夜の国。そんなネクタイな
んの役にもたちません。

二階堂

悔い改めよ。やがてあなたも懺悔する日が来るでしょう。

女王

来ません。私は反省なんかしません。それより二階堂先輩。本日のいけにえは
決まりました。

二階堂

わたしが土に埋められましょう。姫、あなたのために。

二階堂はネクタイをはずす。

二階堂

ここからは、プライベートだ！

ラグビー部

おお！

女王

儀式の準備を！

祭典の音楽が流れる。

二階堂はふてきな笑みを浮かべて姫をみつめる。

やがて準備が整い。二階堂は姫の胸をちよつとだけ触るかと思いきや、揉みま
くる。

騒ぐ群衆。

二階堂

ご馳走様でした！

女王

なにをする！

二階堂

ナニをしたんです。ナニしてあげたり。ナニしてもらったりしたいんです。

女王

ではさしてくださいとお願いするか？

二階堂

さしてください。さしてください。さしてください。

女王

情けない。二階堂駿。かつて花園を沸かせた男のそれが成れの果てか。

部員③

(のりちゃん) 待ってください！

ラグビー部 のりちゃん！

のりちゃん 僕たちは、童貞です。まだ女の人を知りません。女子バレー部と聞いただけで、おちんちんは立ちます。女子バスケット部でもそうです。ソフトボール部のキャッチャーと聞いても、やっぱり立ちます。女の人はそのを、いやらしいとかスケベだとか言うかもしれません。でも違うんです。これは寂しいことなんです。哀しいことなんです。何でもありません。何でもありません。そう思う僕と、何でもありません。何でもない僕とが、おへその辺で…あ…あ…ドンパチドンパチしている。僕たちが好きでラグビーやってると思うなよ！

ラグビー部 そうだ！

ラグビー部の男たち、のりちゃんを祝福する。

女王 連れて行け。この男姫の栄養にはならん。

二階堂 さしてくれ！頼む。(土下座する)

けれど二階堂は陰々滅滅に連行されんとす、そのとき二階堂はまた笑う。

姫 まってその笑いはなに？

二階堂 わらってません。

姫 あなたはわたしを愛しているの？

二階堂 愛しています。もしも水爆が落ちたらあなたをこそ助けなければ、ね、だからさせてください。

姫 したいだけじゃなくて。

二階堂 愛です。愛、愛、愛、愛。

姫 愛？

二階堂 愛です。

姫 したいだけ？

二階堂 では姫さまその愛としたいだけ、あなたに分けることが出来るのですか。

女王 偉そうに言うようなことか。早く連れて行け。

二階堂 あなたはこの国で唯一の女。やがてはこの国を出ていい男を捕まえてはな

女王

らない身なのに、情けない、愛としたいだけの区別も出来ないとは。

聞く耳もたん。つれていけ

姫

まって。その男、私の部屋へ

姫

姫！

このとき陰々滅滅が女王に耳打ち、

女王は二階堂をじっとみて姫の説得をやめてしまう。

姫

愛としたいだけをわけろですって。馬鹿らしい。そんなことは二流三流の恋愛です。あなたはしたいだけ、わたしとは寝たいだけの男。でもいいでしょう。させてあげましょう。そしてあなたに地獄を見せてあげるわ。

二階堂

してやるよ。

姫

してあげる。

女王

セックスの準備を！

↑↑「OVERNIGHT SENSATION」カットイン

姫と二階堂は踊る

国じゅうがゆれる。

壮大で猥褻なダンスシーン。

ラグビー部員たちが手にしていたラグビーボールが突然、包帯を巻いた女の顔になる。

女

え…。

女の気持ちの中で「しょうもないこと」が吹き上がる。無名の群衆と化した、

「ちあきなおみの国」の人々はその吹き上がった女の気持ちを言語化する。

「しょうもないこと」①

もう私には何も関係がなくなった

海も太陽も お手入れも買物も

照れなんて似合わない チークもサンダルも

もう何も関係なくなった

私はもう、失くしてしまった

「しょうもないこと」②

傷は山脈みたいだ

傷はあごから唇の端にかけて

傷は無視が入り込んだみたいに

少し熱を持ったみたいに、熱い

女 やめて！…しょうもないことは考えたくないの、馬鹿なことしか考えたくないの。

少女が現れる。「ちあきなおみの国」の人々は去る。

少女 しんどのいの？

女 …うん。

少女 何にも考えんかったらいいやん。

女 話がしたいねん。若い頃のお母さんと。

少女 ゆっくりしたらいいやん。

女 このままじゃ私、だめになってしまうねん。

少女 リリアンできた？

女 あ、ごめん。こんど作ってあげるから。

朝が来て少女は消えてしまう。

女はベランダから部屋にもどる。

隣の部屋であきら君の目覚まし時計の音がしてあきら君が起きる音がする。

あきら君が女の部屋をのぞく、女と目があう。

あきら

いってきます。

あきら君は部屋をでる。

女はそのまま寝てしまつ。

一日がたつ。

あきら君が帰ってくる。

女はまだ寝てる。

あきら

…。

女は目を覚まし寝たままあきら君に。

女

しんどい

あきら

バーカ！

あきら君は自分の部屋に入る。

女はそこらにあるゴミをあきら君の部屋に向かって投げつける。

暗転

シーン⑤ 父が来る

母が来ている。再び汚れた部屋にあきれながら女に外にでるようにせかしている。女はさっきまで寝ていたようだ。

母

あんたいい加減にしいや。

女

しんどいの。

母

情けない。また保険証おちてる。ちよつともう。

母はかるくでも掃除していいこうか悩む。

母

あーもうはらたつ。

ペランダをあける。

何するの？

こっから全部すててもうたろかいな。

やめてや。

するわけないやないの。はよおき。

なによ。

お父さんきてはるの。

∴。(倒れる)

いま喫茶店でリョーに相手してもらってるし。あんたはよきがえよし。

女は「もういや」って感じでベランダから鳩にえさをやる。

母はベランダの網戸をしめてしまう。

母 昨日あきらくんから電話があつてな、あきら君今日お仕事早く上がらしてもら

つて、お父さんと話するねんて。

わたし聞いてへんよ。

あんたなんか相手にするかいな。

もう。私のことやんか！

マヨネーズくさるで。

聞いてよ。

お父さんまっではるから。

わたしだつてな。

わかるわよ。∴でも、お父さんまっではるから。

ぜんぜんわかってないやん。

母は女に身支度を急がせる。

舞台は変わって父とリョーのいる喫茶店。

みる引越し屋に女の子がおる。

∴。

お前。卒論はどうや。

父 弟 父

母 女 母 女 母 女 母 女 母 女 母 女 母 女

母 女 母 女 母 女 母 女

母 女 元気なわけないやん。

母 座りなさい、あんたこっちいくか、リョーお父さんの隣いき、あんたこっちすわりって、ナニにする？コーヒーでいいか。

父 ご飯は？

母 ご飯はって？

女 食べてない。

父 そしたらこれにせい、ホットサンドにアイスクリームついてる。

母 ホットサンドにアイスクリームついてるんやて。

父 お前目つかれてるやるこれブルーベリーにせい。

弟 なにはしゃいでるの？

母 ブルーベリーにするかって。

女 卵サンド。

母 ブルーベリーも食べなさい。

女 いらん。

母 疲れてるかって思ったんよ。すいませんコーヒー二つと卵サンド。

沈黙

弟 元気そうやん。

女 なんだあんたがおるの？

母 心配してるんやないの。

弟 就職きまったよ。

女 ききたない。

母 帝人やで。

女 …。

父 どうでもいい。

母 どうでもいいって。

父 黙ってい。

母は女に小声で。

母 喫茶店で黙って行って、なー。

沈黙

コーヒーとタマゴサンドがくる。

父 痛いかな。

女 いたい。

父 どうなったんや。

女 この皮がはがれた。

母 いやー。

父 見せてみい。

女 いや。

弟 お姉ちゃん病院の領収書のこしてるか。

女 え？

弟 高額補償とかでるやろ。

女 なにそれ？

母 わたしわからへんわ。

父 あれはあれやろ、一定額が、あれやろ。

弟 多分出るとおもうよ。

母 ほら。リョーに来てもらってよかった。

女 そんなん早く言っつてよ。

父 事故起こす前にな。

弟 うわー。

沈黙

父 おい。

母と女と弟 え？

母 おトイレあっち。

父 違う。

母 え？

父 もうええ。…お前は電話しろよ。どないおもとるねん。

女 ごめん。

父 考えられん。

女 しんどのい。

弟 花粉症？

父 違う。

女 だから傷見してみい。

父 なんですよ。

女 グチグチしてたかてしゃーないやないか。

父 もうちよつとまつてよ。

母 充分時間たつてる。

女 でもお父さん反対せーへんつて。

母 は？

女 昨日な、あきらら君と電話でしゃべらはつてん。別に反対せーへんいうてはるわ

母 よ。

父 何のはなしよ。

母 好きなようにやったらええ。別に反対も何もないわ。

父 お父さん。

母 勝手に家でて、電話もしてこんで、それで交通事故つてもう何にも言えん。結

女 婚したらいいねん。

母 うわー。

父 リョー。

母 結婚して苦労してみい。

女 ちよつとまつてよー。は？

父 あのかな。お母さん思ううんやけどな。あんた結婚むりやおもうわ。

母 おい。

父 いやお父さんのいわはる通りなんやけど。

母 そしたらいいやないか。

母 まだ子供よ。

父 お前言うてることバラバラやないか。

母 あきら君はいい子やけど、この子がね。

父 もうしゃべるな。

母 あんな、お母さん思うんやけど、ちゃんと早く起きて、いっぺん電車のとつてど

父 つかいき。

母 何をいうてんねん。

父 日帰りでいいから気分転換してき。

母 そういうのがダメなんじゃない。

弟 なにが。

母 電車乗ってどつかいてどうするの。

父 考えが浅いんや。電車のとつてどつかいくんやったらそのままそこで生活してみろ。

母 そうじゃなくて。

父 考えて行動しろ。お前ら考えが浅いねん。大学かてあれや資格もとらんと卒業して、会社潰れたらポーンと家飛び出して。お前家でるときどんだけ考えた？

女 悩んだよ。

父 悩んだかきとんのとちやう。考えたかつてきとんねん。

女 もう。

母 あんた口臭いわ。これ食べ。

女 うるさいな。

父 何年後にはこう。何年後にはこうってちゃんと考えたんか。

母 あきら君は考えてるわな。

父 ぐあーあああ。ほんまに。引っ越し屋で女の子かて筆筒はこんどるんやないか。もつとしっかりせい。気分転換ばっかりしてたらしばきたおすぞ。

母 …いまこの子悩んでるのよ。もうちよつと静かにしといたって。

電話がなる。リョーの携帯。

弟 はい。あ、わかりました。栃木の人。

父
こら。

母がうけとる。

母
はい大西です。ああどうもすみません。忙しいでしょう、今そろってますよ。
はい。ゆかりもいます。いまねこれエルドラド。家からちよつと行つたとこの
そうそう、お食事ラウンジエルドラド…。

そのあと舞台にあきら君があらわれ、人は食事に行く。

父とあきら君が大人の挨拶をしているのを女はみている。

舞台は暗くなる。

女とあきら君は歩いている。

女の家族とのお食事会の帰り。

あきら
よかった。…お父さん機嫌よくて。

女
あわせてんねん。

あきら
そりやそうだけどさ。

二人の行く道に皮膚病の犬。

あきら君は無視して通りすぎる。

女
犬きらい？

あきら
いや、べつに…。

女
わたしに傷ができたから結婚するの？

あきら
そうじゃないよ。

女
じゃなんで急に結婚なん？

あきら
急にじゃないやろ。これだけ長いこと付き合ってるんだから。

女
愛って何？

あきら
は？

女
情けは鎖、縛られて動けなくなる。憎しみは愛の裏側、暴力は子供の愛。お金

は…お金？

あきら
なに言ってるの。

女
先かえってて。

あきら
…。

女
すぐ帰るから。

あきら君は去る。

女はゾルダンの目をみつめる。

シーン⑥ 愛にしっぽがはえる

女
焚き火みたいに、ちろちろ火が見える。二人は抱き合った。セックスは愛の焚き火。あれから二人はなんどもセックスをした。

舞台奥に二階堂と姫のセックスシーン。

女
二人のセックスはすごかった。いいセックスだった。横綱同士ががっぷり四つって感じだった。二人ともナニをしているのかわからない、そうだセックスだと思ったときには、相手のへんのとこがこころへんにあって、とんでもないところをとんでもないことしてる。でっかいお好み焼きをへらのまま食べてるみたい。よくわからん。分けようと思った「愛」と「したいだけ」は混じりあって、ひとつになって、今に皮膚が破け自分の内側がドロドロ流れ出しそうだった。終わって姫は聞いた。

姫
まだしたいだけ？

二階堂
したくてしたくて、したい。

姫
…だけ？

二階堂
だけはつかない。

女
姫の計算はこうだった。明らかに自分とはしたいだけのこの男にわざとさせてあげて、深みにはめてから埋めてやる。計画は半分成功。男は見事に深みにはまった。けれど姫のほうも、…。

姫

バツチコイ！

二階堂は再び姫に挑む。

長谷川きよし「黒の舟歌」かかる。

舞台上に布団をもった人々。群舞する。

その布団のひとつからあきら君と女が出てくる。

女は少し不機嫌そうだ。あきら君は内心あせる。

セックスのあとあきら君はバスタオルを腰にあてちらちらみせながら踊る。

あきら

♪不意チン不意チン不意陳さん「はい陳あるよ不意な登場ごめんねー」。

女

ほしいほしい。

あきら

だめあるよー私あきら君のものあるよ。

女

切るぞ！

あきら

乱暴な女あるねー私植物だからここはなれられないよー。

女

植物？

あきら

そうあるよ。

女

大事にするから。

あきら

ダメダメよー。

そのままあきら君は洗面所のほうへ。

女は少女との約束を思い出しリリアンに手を伸ばし編み始める。

女にとって至福の時間が流れ出す。

それは考えることをやめた顔。

あきら君が帰ってくる。

あきら

♪もろチンもろチンもろチンさん「はい陳あるよもろな登場ごめんねー」。

女はそれに無関心。

あきら

ほらーほしくないあるかーこれ持ってたら少年野球も出来るあるよ。

その一声に女は反応しチンチンをほしがる。
当然逃げるあきら君。二人はラブラブである。

あきら君は女を捕まえて言う。

あきら 見せてみるよ。

女 え？

あきら 結婚するんだから見せてみる。

女 …いや。

あきら いいから。

女 傷見たらなんかあるの？

あきら いいから見せてみるって。

女 いや。

あきら 見せてみ。

女 私のことかわいそうとか思ってるの？

そう言われてしかたなくあきら君は部屋を片付け始める。それをやめさせようとする女。

別の布団では姫と二階堂がセックス中。その二階堂のお尻にしっぽがはえてい

る。
それに気づき姫は声をあげる。

姫と二階堂の部屋に女王と陰々滅滅と墓掘り人がはいつてくる。

女王 愛はすぐに形を変える。愛から愛と呼んでいい何かへ。この部屋にあるのももはや愛と呼んでいいなにか。姫気がつかなかったのですか。

姫 どういうこと。

女王 この男。犬の子です。

姫 犬の子？

陰子と滅子 川をさかのぼったところ、雲から水の落ちるところ。尾の生えたものらが住む村がある。

女王 この男の目を御覧なさい。そこにあなたの姿はありません。

姫 え？

陰子と滅子 犬の子の目に女は映らない。犬の子は全てをわかった顔をして、スプーン1杯もこぼすまいと優しく待ち構えているが、優しさは通りぬけ、女はいずれ落下する。

姫 この人にしつぽなんてなかった。

陰子と滅子 犬の子は愛を受けてしつぽを生やす。

女王 かわったんです。愛にしつぽがはえたんです。言え！犬の子。お前の愛を！
女とあきら君のところではあきら君が女の部屋を片付けている。女はそれを見ている。

二階堂 君が喋りたいときには僕はいくらでも喋らせてあげよう。君が甘えているときには僕は先回りして君をしかつてあげよう。君が疲れているときは台所にシヤケの塩焼きに、冷蔵庫にはかぼちゃのサラダ…。

女 かわいそうやから結婚するの？

あきら もう喋るな。

あきら君は女を強く抱く。

二階堂 そして僕は先に寝ていよう。扉を開ける音がしても、シャワーを浴びる音がしても、僕は寝たふりを続けよう、君が機嫌のいいときはぼくも一緒に盛り上がる。24時間。君をみていよう。

姫と女 ちゃんと私のこと見てる？

あきら君と二階堂 見てる。

姫と女 わたしは、ちゃんとあなたのこと見えてるのかな？

女王 あなたが見ているのは犬の子。犬の子の目にあなたは映らない。これは愛ではありません。

姫と女 …なんかわからんようになってきた。

女王 連れて行け。

陰々滅滅は二階堂を連行しようとするが姫は二階堂を奪い、逃げる。

女王 追え！駆け落ちよ！

シーン⑦ 判断保留の駆け落ち

はしだのりひこ「花嫁」がかかる。
姫と二階堂は逃げる。追う女王達。

女 たとえそれが愛じゃないかもしれないけれども。愛にしつぽがはえたとしても。別れることはできない。別れたくなかった。二人は向かった、犬のこの村へ、川をさかのぼり谷を越えて、そこで新しい生活を始めようと。

音がやんでそこに少女の姿。

少女 一緒やって、そんなこととしても一緒。
女 でも二人は好き同士やねんできつと上手くいくよ。
少女 愛にしつぽがはえたんやろ。
女 …。
少女 その傷。あきら君にみせれるの。
女 …。
少女 リリアンしよう。

暗転

シーン⑧ どんづまり

舞台では女がリリアンを編む姿。女は姿の見えない少女と会話をしている。
あきら君がじつとそんな女をみている。

(少女 どんだけできた?)
女 こんだけ。

(少女) 上に上げて)

女 ほら。わたしこれやり出すとまらへんねん。よくお母さんに怒られた。

女(と少女) そんなんいつだつて出来るでしょう！

女 見てるだけで楽しいの？

(少女) たのしいよ)

あきら おい。

(少女) 楽しい？)

女 楽しいよ。

あきら おい！

女 「おい」って言われた。わたし「おい」って名前ちやうもんな一

(少女) な一)

インターホンの音がなって父と母と弟がやってくる。

父 どないしたんや。おいユカリ、ユカリ、何をしとるんや、しつかりせい。おい。

母 あんた頭おかしなつたんか？

父 アホ！お前は何をいうとんねん。ユカリしつかりせい。

弟 やめたほうがいいって。

父 何をいじつとんねん。しつかりせい。

弟 こういうときは励まさないほうがいいんだって。

父 おい。

女は父におびえたように後ろずさる。父はそんな娘にショックを受ける。

父 …かえろ。お前もう家帰って来い。もうええ、ゆつくりしたらええ、もう家帰
って来い。

あきら すいません。

弟 ちよつと向こうの部屋で。

あきら はい。

弟 オヤジ、オヤジ。

父

…わかってる。

あきら君は父と弟をとりあえずといった感じで自分の部屋に連れて行く
母のみが残り女のすることをじっと見てる。

母

あんた頭おかしなっただんか？

女

なってないよ。

母

ナニをやってるの？

女

あんでるの。

母

面白い？

女

…。

母

カラオケいくか。リョーに車出してもらって、どっかいこ。

女

もういやや。

母

わたしのほうがいややわ。頭おかしなで。

女

もう疲れた。

母

アホか。

女

わたしの話も聴いてよ！

その声はあまりにも大きく母は黙り込んでしまう。

隣の部屋から弟が顔を出す。

弟

お母さんお茶いれろやっつて。お母さん。

母

お茶ぐらいじぶんでいれ。

その言葉を聴いて父が入ってくる。

父

おい。なんやお前その言い方は。

母

なんでわたしがよそのうちきてまでお茶いれなあかんの。

父

お茶ぐらいいれたらええやないか。

弟

もうやめようや。

あきら

僕いますから。

父 よその家でおつきい声ださすな。だいたいなお前がそういう性根でいるから、
なんやこの部屋は見てみる。戦争でもあったみたいやないか。

母 この子は中学高校とずっとバレーボールがんばってきたの。
父 理由になるかいそんなもん。

男三人（父、弟、あきら君）は苦笑い。

母 なにがおかしいんよ。わたし何も笑われるようなこと言うてへんよ。この子ホ

ンマにバレーボールがんばってたんやから。

…。

弟 そーゆう問題じゃなくてさ…。

父 リョー。…黙ってい。

母 この子はね。そんなポキツといってまうような子ちゃうの。ジワジワジワジワ
復活する子なの、頭いい子なの。いま必死に考えてはるねん。あんたら向こう
でドンジャラでもしどき。…なんやお母さんというてごらん。

…あんなしつぽがはえてん。

弟 もうあかんわ。

以下、女と母の会話と男三人の会話は同時進行で進められる。

女と母の会話

誰に？

女 二階堂先輩。それで女王と陰々滅滅が捕まえようとしたんやけど姫は二階堂先
母 輩と一緒に駆け落ちするねん。だってそうやるいくら愛にしつぽがはえたから
って、純粋な愛じゃないかもしれなかつて、好きな人と一緒にいるほうが幸
せやん。

男三人の会話

父 すいませんな。

あきら いえ…。

弟 ビタミン不足って話もあるらしいよ。それで頭のめぐりが悪くなってどんどん気分が落ち込んでいくねんで、なんにしろちゃんとした病気なんやから病院いくのが一番やと思う。

あきら ホント、すみません。

父 いやこちらこそ。

あきら 今日はどうします。

父 明日病院連れて行きます。

あきら なんてしたら泊まっついてもらっても。

父 いやいや。

母 で、二人はいまどこにいるの？

シーン⑨ 犬の子の村

女 犬の子の村にいる。その村の中央には高い塔があつて…。

氷結していた物語の世界が動き出す。
舞台に高い塔。その中に姫がいる。

女 …その塔の一番上には大きな釣鐘がある。その釣鐘の下で姫と二階堂は隠れ住んでいた。姫はほとんどの時間待っていた。ブルボンのお菓子を食べながら塔の階段を上がってくる男の足音を待つ時間。姫はその村でも有名な顔だったから昼間は外にはでられなかった。男は朝早くどこかに行つて夜かえってくる。姫はただ待っている。待ちながら思うことはこの塔の下。誰もがウジャウジャと働いていてそのウジャウジャのなかから必ず一人。ここに帰ってくるということ、まるで他人事みたいだ。姫は口に出していつてみた。

姫 まるで他人事みたいだ。まるで魚みたいだ。まるで天気がよすぎるじゃないか。まるで手術みたいだ。まるで箱の中みたいだ。まるで…。

女 まるで客のこないすし屋のようだ。そのうちじぶんがすし屋であることも忘れ

姫
ちやったりなんかして。昼間はベランダから決まって鳩に餌をあげる。
まるで年寄りみたいに。

姫はぼんやり外をながめる。

女
母
：いろいろな音が聞こえてくるねん。一人でずっとまっていたら。
…。

塔を上ってくる靴音がする。

二階堂がかえってくる。

二階堂
ただいマンドリル。

姫
おかえリンゴスター。

二階堂
♪手開き手ビラキー 鯛の手ビラキー。新聞紙ない？

姫
ない。今日はナニ？

二階堂
鯛の手開き。

姫
それって料理なん。

二階堂
しょうがとお酢で煮込むねん。

姫
気持ち悪。

母
ぶっさいなーこの姫は。

姫
だって姫やで。

母
もつとかわいくないと。

女
そんなん死んでまうわ。

母
かわいいぐらいで死ぬかいな。

女
これで十分かわいいの。二人は好き同士やねん、だからちゃんと努力もする。

母
女
そしたら上手いこといくでしょう。
でも。

姫は再びベランダに腰をすえる。

二階堂 今日は何してた？
姫 まるでごっこ。
二階堂 なにそれ？
姫 わたしはまるで何々みたいだ。
二階堂 なんやねんそれ？
姫 わたしはまるでナニにみえる？
二階堂 まるで：招き猫。
姫 違うな。
二階堂 ちがうんかい。
母 なんやこの会話は、雷落ちるで。
女 でも姫もしんどいねん。
母 誰かてしんどい。
女 (母を無視して) 例えば外を見ていても、姫の耳は部屋のこと全部わかってる。
母 男が帰ってきてから実は姫は緊張しまくってる。二十四時間あつて二人の会話は三十分もないけど、姫はすべてをかけてるねん。
女 あかんな。ぜんぜんだめ。
母 え？
女 へたくそすぎ。ぜんぜん伝わってへんやん。からからまわってるわ、私音がきこえる。
女 なによ。
母 空回りしてるいうてんの。
女 どうしたらいいのよ。
母 キンメダイと牛蒡を甘辛くたいとくのよ。それから会話をはじめるねん。
女 姫は姫なの、そんなん作れるわけないやん。
母 関係あるかいな。
女 もういい黙ってて。
母 はいはい。
女 :
母 それからどうなるの？好き同士でなんで上手いこといかへんの。
女 犬の子の愛はジーンと姫を見てる。でも本当に姫を見てるのか、やっぱりわか

らへん。なんか置いてけぼりみたいで、ただぼーっと愛されてたらいいんやけど、姫が一番苦手なのはなにも考えないってこと、いろいろいろいろ考えちゃって、疲れて、放火したくなる。

陰々滅滅やね。

そう。陰々滅滅がやってくる。

陰子と滅子あらわる。

なにこれ。

陰子と滅子。二人は妖精やねん。女のだるーい気持ちからぼうふらみたいになってくる。そして女王がやってくる。

女王が現る。

え？由紀さおり？

そう姫のお母さん。

あんたあほなこと考えてるねんな。

哀れな。

あわれなん？

だって姫は姫やってんで。

この人は何しにきたの。

姫を連れ戻しに。

なんで。

だって。

あなたは本物の愛をつかまなくてはいけません。この部屋にある愛にはすでにしつぽがはえている。さ、帰りましょう。

しつぽ。

かわいそうとか責任感とか、そんな愛、私腐ってまう。

女は鮮度が命です。犬の子の愛はあなたを腐らせる。国へ帰りましょう。

姫はなんて答えるの。

女と姫

「いや」。

女 だって二人はもうお互い想像もつかへんねん。隣にあの人がいないなんて、別に分かれるのが怖いわけじゃないんやけど。

母

怖いのよ。

女

怖くないもん。

母

怖いのよ。

女

決め付けんといてよ。

母

(女を子供扱いするように) はいはい。

女

やめて！…女王と陰滅は二階堂を連れて行こうとする。二人の手が伸びる。手をつなぐ。けれどまた引き裂かれる。好き同士やけど、一緒にいたらだめになる。手が伸びる。手をつなぐ。けれど引き裂かれる。手が伸びる。…。

女のセリフにあわせて姫と二階堂たちは動く。

母

別れたほうがいいな。姫はいつか溺れ死ぬで。

女

は？

女王

それは洪水です。犬の子の愛は洪水。わかるでしょう、姫。あなたはここに来てプライドを失くしてしまった。今のあなたは何もできない女。男の帰りを待つだけの、面白みのない女。あなたはおびえ始めている、この愛はいつまで続くのか何故この愛は与えられるのか、まるでわからなくなる。わたしはこの人に何がしてあげられるのか。

女と姫

なにもできひん。

女王

けれど愛される。今のあなたはまるで愛の洪水に流される目を開いたお人形。

母

どうするの？

女王

犬の子と暮らすか国へ帰るか、自分で選びなさい。

女

…私は別れたくないんやけど、もう逃げ出したいねん。…この人いつになつたらちゃんと結婚の話してくれるのかって、ずっと待ってたんやけど、顔に傷ができて結婚って、わたし…。

姫が女の気持ちとは無関係にうごきだす。

姫 わたしは、国に帰ります。

女 ちよつとまってよ…わたしまだ答え出せてないよ。

姫 わたしは国に帰ります。わたしはこの人を土に埋めてしまいます。

女王 さあ幕が開きますよ。あなたを迎える拍手の音です。

女 ちよつと勝手なことせんといてよ！

ゾルダン もう終わりです。次はあなたの番です。

女王と陰滅らは「夜の友達」の顔にもどり、姫を追いかける女を追り返す

女は呆然と見送ることしかできない。

女 なんで、なんでそんなことできるの…。

母 こっちおいで。傷みせてごらん。

女は母に顔をみせる。

母 あきら君にはみせたんか？

女 …。

母 いっぺんお料理つくってまって下さい。

女 できひん。

母 お醤油とおさとういれたら何でもすき焼きみたいになる。それっぽいにおいがしたらゴウセイやなーって食べてくれるよ。それでお酒だして、ゆっくり話してごらん。

女 …わたし、大丈夫なんかな。

母は女をだく。

シーン⑩ 始発電車

気がつけばもう早朝である。

母は女の傍らで眠り、父と弟はあきら君の部屋で寝ているのだろうか？
女は母にバスタオルをかけると、部屋をでる。

ゾルダン

そのアパートの四階に住んでいる女は、明け方、五時になったばかりでしょうか、ここを通っていきました。東のほうから空はだんだんと黒から青へ、女は西に背を向けて東に顔を向けあっていましたから、よく覚えていません。差し込む太陽の光がまぶしく女の顔を照らしていたことを、あれはなんでしょう、古い歌謡曲でしょうか、小さく歌をうたっていました。

女は「喝采」をくちづさみ、歩く。

もうひとつの風景として二階堂が埋められていく姿。

女は駅にたどり着く。

電車にのる。

風が吹き女が隣の車両をみると女の姿がみえる。

女は姫を追っていくつも車両を渡るが一度として同じ車両になることはない。

走りつかれた女は座る。

その傍らに姫が座る。

お仕事ですか？

いえ。

この時間の電車やつぱりお仕事の人ばかりで。みんな眠たそう。

：わたしもちよつと前まで、この時間の電車にのって働いてたんです。でも会社が潰れちゃって、…なんかやこしいこといっぱいあって。

厄年ですか。

あ、そうなのかな。

どこまでいくんですか？

とりあえず、どうしよ。気分転換なんです。

いいですね。

どちらまで。

男捜そうかなーと思って。

姫 女 姫 女 姫 女 姫 女 姫 女 姫

女

朝から？

姫

はい。

女

：外人さんとかどうですか。

姫

いいですね。

女

このまま外国まで。

姫

いきたくないー。

女

そうよね。

姫

次はちよつと冷たそうな人がいいかなーと思つて。

女

え。

姫

わたし考え浅いんですよ。だからわたしと正反対の人がいいかなーつて。

女

苦労しますよ。

姫

はい。

女

理系の男ですか。

姫

まあ理系じゃなくてもメガネかけてテンション低い人。

女

いいですね。

日の光が二人をさす。

女

顔に傷ができたんです。そしたら彼氏が結婚しようつて、優しい人なんです。

姫

でも考えちゃつて、愛つてなんなのか、それであなたのことを思つたんです。

女

私と一緒に考え浅くて自分のことしか考えない人。

姫

ひどい言いかた。

女

教えてください。どうしてあの時あの人を捨てたのか。

姫

あの時私も考えたんです。愛つてなんなのか。でも正直わかんなくて、あの人

女

がちやんと私を見ているのかとか、愛の洪水がどうか、もうちよつと深くか

姫

んがえたらわかるのかもしれないけど、あんまりぴんと来なくて、え、誰のこ

女

とつて思つちやつて。それじゃせめてポリシーをもとつと、私は何が嫌いで、

姫

何が許せなくて、どういう風になりたくないか、そこからわたしにとって愛と

女

は何か見つけ出そうと。

女

見つかりましたか？

姫 女 姫
はい。私は…貧乏くさいのが嫌い。
は？

あの人紅茶を入れてくれるんです。でもお箸でかき混ぜるの、それもひとつのティーパックで何杯も入れるの。そりゃ貧乏なのは仕方がないけど貧乏くさいのはだめ、許せない。

…え？

姫 女 姫
あの人のことはほんと好きだったけど、だめ、貧乏くさいのはだめ。

姫 女 姫
考えあさくないですか。

姫 女 姫
仕方ないわよ。

姫 女 姫
ホントにあの人のこと好きだったの？

姫 女 姫
好きだったわよ。でもね、演歌歌ってる人はどんなに生活苦しくてもキンキラ

姫 女 姫
キンの衣装をきるの。

姫 女 姫
つらくないですか？

姫 女 姫
つらくないわよ。

姫 女 姫
苦しくないですか？

姫 女 姫
苦しくない。

姫 女 姫
苦労しますよ。

姫 女 姫
はい。苦労します。

姫は立ち上がる。

二人は手を振って別れる。

電車の音は続いてゆく。

シーン⑪
テンションの問題

ここは二人の部屋。女は男を前にして顔のテープをとっていく。

なまなましい手術の後がそこにはある。

あきら君は女を抱く。

あきら

大丈夫。…大丈夫や。

女 ナニが？

あきら 大丈夫。

女 誰にいつてるの？

女 はあきら君から離れる。

女 ちゃんどこっちみてよ。

あきら 大丈夫。

女 それ以外なんかいつてよ。

あきら …。

女 かわいそうなんて愛のテールやん。そんなんじややっていかれへんつて。

あきら え？

女 別れよ。

「あの鐘を鳴らすのはあなた」をスカ風に編曲したものが流れる
そういつて女は汚い部屋を片付け始める。

あきら は？

女 いままでお世話になりました！

あきら お前テンションだけだぞ。

女 仕方がないやんか。

あきら 仕方がないつてなんだよ。

女 貧乏臭いのがいやなの。

あきら 考えあさいつて。

女 わかっている。

あきら わがまますぎるぞ。

女 もう幕が開くのよ。拍手の音がわたしをまってるねん！

あきら 待つてないよ。

女 は荷物をまとめると玄関先で。

女

わたしのために祈ってな

あきら

バカじゃないの

女

ごめん！

女は出て行く、顔にテープもつけずに。それは事故以来初めてのことだ。
男はそのことに気がついて、うれしくなって、女を追いかける。

おわり